〔古事記中垂仁〕是御子、○本牟智和氣御子八拳鬚至于心前、眞事登波受、此三字以音故今聞高往鵠之音、始爲阿藝登比、自阿下四字以音爾遣山邊之大鵠、此者人名令取其鳥、故是人追尋其鵠、自木國到針間國、亦追越稻羽國、卽到旦波國多遲麻國、追廻東方、到近淡海國、乃越三野國、自尾張國傳以追科野國、遂追到高志國、而於和那美之水門張網、取其鳥、而持上獻、

〔古事記傳二十五〕鵠之音は、多豆賀泥と訓べし、遠飛鳥宮○允恭段、輕太子の御歌に、多豆賀泥能とありなほ萬葉などにも多かり、上代には、鶴をも鵠をも鸛をも共に總て多豆と云るなり、久具比意富登理など分れたる名あるは、やゝ後のことなるべし、萬葉三十九丁に、近江海、八十之湊爾鵠佐波二鳴とある、此も多豆に鵠字を書り、鵠と鶴とは別なれども、漢國にても、鶴の事を鵠と云る例も多く、又字音も其鳥も似たるから、混れつることもあり、五雜俎と云書には、鵠卽是鶴とも云り、さて又鶴は、秋の末より春までならでは、此國には居ぬ物なるに、萬葉に、夏又秋初などの歌に、多豆の鳴ることをよめり、是鵠又鶴などを多豆と云るなり、さて此は鶴なるを、通はして鵠とは書るか、はた久具比なるを、多豆と云るか、其差は辨へがたし、何れにまれ、訓は多豆なるべし、和名抄に、○略中野王按、鵠、大鳥也、漢語抄云、古布、○略中字鏡に、鵠、久々比、又古比とあり、漢語抄の古布と、字鏡の古比とは通ひて一ツ名なるべし、さて今右の三ツを字にて云はゞ、鶴は都流、鵠は白鳥と云物、鸛は許布と云物なり、然るに右の書どもに、鵠を古布とも古比とも云るは、違へるに似たり、今許布と云物は、鶴に當れり、さて又久具比と云しは、鵠のことなりとも云、鸛のことなりとも云、鶴なりと云は、誤なるべし、神樂歌、湊田に、美奈上多仁、久々比也、也川乎利也云々、東遊彼乃行に、加乃由久波、加利加久々比加云々、師(賀茂眞淵)云、久々比は、今白鳥と云物なり、古布には非ず、古布はたゞ雌雄一つがひのみ居る物にして、群居る物にあらざれば、八居と云るにかなはず、白鳥は多く群集る物なりと云れたるが如し、又雁かと見まがへたるも、白鳥にてこそ然るべけれ、

〔常陸風土記香島郡〕郡北三十里白鳥里、古老曰、伊久米天皇仁○垂之世、有白鳥、自天飛來、化爲童女、夕上朝下、摘石造池、爲其築堤乎、徒積日月、築之、築壞不得作成、童女等唱曰、志漏止利乃、芳我都々彌乎、都々牟止母、安良布麻目右疑波古叡□□□□斯呂唱、歌昇天、不復降來、由是其所號白鳥鄉、

〔日本書紀七景行〕四十年十月、日本武尊○中略既而崩于能褒野、○中略仍葬於伊勢國能褒野陵、時日本武